

受賞の言

いしかわ りょうた

97 年大阪大卒、03 年同大学院文学研究科博士課程修了。博士号（文学）を取得。佐賀大助教授などを経て、14 年 4 月より立命館大経営学部教授。74 年生まれ。



「開港」への複眼的アプローチ

立命館大学経営学部教授 石川 亮太

2016 年は日朝修好条規が締結された一八七六年から数えて 140 年目となる。これに始まる日朝関係が、最終的に 1910 年の韓国併合に行き着いたことを思えば、その評価には困難が伴う。だがその意味を問い直すことなく、忘れ去ってよい事件ではない。

さて日朝修好条規の締結は、朝鮮から見れば、対日関係における節目となったのと同時に、近代世界を覆う自由貿易に門戸を開いた瞬間でもあった。本書ではこのことに注目し、朝鮮開港を国家間の角逐の中でのみ理解するのではなく、近代アジア市場という、ひとつつながりの「場」が形成される過程の中で考えようとした。舞台回しとなったのは、開港後の朝鮮で活動した中国人商人＝華商である。一九世紀の後半、アジア各地に進出した華商は、それぞれの社会では周縁的な地位に甘んじながら、国境を越えるネットワークを形作り、アジアに地域市場としてのまとまりを与える役割を果たした。

朝鮮に進出した華商は、日本人商人のライバルとなった一方、日本企業の提供する交通・金融サービスを存分に活用し、神戸や横浜の華商たちとも連携して、上海を中心とする華商ネットワークの一端に連なった。彼らは朝鮮現地の商人とも深く結び付き、その国際市場への参加を仲介した。日清・日露戦争に勝利した日本の勢力拡大は、朝鮮における華商の活動にも影響を与えたが、彼らは一方的に委縮したわけではない。それどころか、日本の帝国を超える華商ネットワークの働きは、その経済体制にとって潜在的な脅威とすらなった。

本書を通じて私は、朝鮮開港後の歴史を、日本との二国間では完結しない、広域的なアジア史の文脈の中で描こうとした。それは、近代日本の朝鮮侵略——そう呼ぶほかないと考えるが——を、新たな視角から問い直そうとする試みでもあった。伸縮する時間軸と空間スケール、様々な行為主体の視点を往復しながら、時代を立体的に描き出すことは歴史学の本領であり、いずれは歴史認識をめぐる対話の一助ともなるかもしれない。分を越えた目標とは思いますが、重みのある賞をいただいたことを励みに、さらに努力を重ねてゆきたい。